

**JAPAN VICE PROVINCE
KOREA MISSION
SPRING MEETING**

EVANGELISATION/MISSION

Input

Bishop Okada Takeo, Urawa Diocese



Kochi

March 24-26, 1992



オブレート会総会 1992

1992 General Meeting Oblates of Mary Immaculate

1992 3月24日 - 26日

24日火曜日

Tuesday 24th

| | | |
|-----------|---------------|-------------------|
| 朝の祈り | 7:00 | Morning Prayer |
| 朝食 | 7:45 | Breakfast |
| 話し 岡田司教 | 9:00 | Talk Bishop Okada |
| コーヒー ブレーク | 10:00 | Coffee Break |
| 分科会 | 10:30 - 11:15 | Group Discussion |
| ごミサ | 11:30 | Mass |
| 昼食 | 12:15 | Lunch |
| 話し | 14:00 - 15:00 | Talk |
| コーヒー ブレーク | 15:00 | Coffee Break |
| 分科会 | 15:30 - 16:30 | Discussion |
| 夕の祈り | 16:45 | Evening Prayer |
| 夕食 | 17:30 | Dinner |
| 夕食後自由時間 | | Evening Free |

25日水曜日

Wednesday 25th

| | | |
|------------|---------------|------------------|
| 朝の祈り | 7:00 | Morning Prayer |
| 朝食 | 7:45 | Breakfast |
| 話し | 9:00 | Talk |
| コーヒー ブレーク | 10:00 | Coffee Break |
| 分科会 | 10:00 - 11:15 | Group Discussion |
| 座談会 | 11:25 - 12:10 | General Meeting |
| 昼食 | 12:15 | Lunch |
| 話し | 14:00 | Talk |
| コーヒー ブレーク | 15:00 | Coffee Break |
| 自由時間 ごミサまで | | Free till Mass |
| 叙階式 | 18:30 | Diaconate Mass |
| 夕食 | 20:00 | Supper |

26日木曜日

Thursday 26th

| | | |
|--------|-------|-----------------|
| 朝の祈り | 7:00 | Morning Prayer |
| 朝食 | 7:45 | Breakfast |
| 話し | 9:00 | Talk |
| 帰る準備時間 | 10:00 | Departure Prep. |
| ごミサ | 10:45 | Mass |
| 昼食 | 11:45 | Lunch |
| 昼食後解散 | | Ends with lunch |

備考

Remarks

1 食器洗い・後片づけはボランチアでやりたいと思いますからよろしくを願いいたします。

1 We ask that the dishes be done and the dining room prepared by volunteers.

2 最後の朝シーツなどを折りたたんで下の玄関において下さい。

2 On the 26th please fold the sheets and towels and put them in the downstairs hall.

3 火曜日の夕方のみものは下の教室でります。

3 Drinks etc. will be in the first floor classroom on Tuesday night.

4 十時すぎにできるだけ静かにして下さい。

4 After 10 P.M. please try to be as quiet as possible.

5 食堂・集まる部屋でタバコを遠慮して下さい。

5 Please refrain from smoking in the dining room and the meeting rooms.

6 車を幼稚園の庭に入れて下さい。

6 Please park the cars in the kindergarten playground.

Thank You

オブレート会研修会資料

時 1992年3月24日-26日

所 高知県



第1回 第2ヴァチカン公会議

教会憲章1（序文） キリストは諸民族の光であるから、聖靈において収集したこの聖なる教会会議は、すべての被造物に福音を告げることによって、教会の面上に輝くキリストの光をもってすべての人を照らすことを切に望む。教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具であるから、これまでの公会議の教えを守りつつ、自分の本性と普遍的使命とを、その信者と全世界とに、より明らかに示そうとする。

2（父なる神の永遠の計画）永遠の父は、その英知といつくしみに基づく、全く自由な神秘的な配慮をもって全世界を創造し、人々を神の生命への参与にまで高めることを決定した。

3（子の派遣）こうして父から派遣された子が来た。父はいっさいのものを子において刷新することを望み、世界の創造以前に子においてわれわれを選び、自分の子どもとすることを予定していた。それゆえ、キリストは父の望みを果たすために、地上に天の国を開始し、父の秘義をわれわれに啓示し、自分の従順によってあがないを成就した。教会、すなわち、秘義としてすでに現存するキリストの国は、神の力によって、世界において可見的に成長する。

4（教会を聖化する靈）父が子に地上で行うべきものとして委任したわざが完了した後、ペンテコステの日に聖靈が派遣された。それは、聖靈が教会を常に聖化し、こうして信ずる人々がキリストを通して、唯一の靈において父に近づけるようになるためであった。この聖靈は、生命の靈、すなわち、永遠の生命のためにほとばしり出る泉である。

こうして全教会は、「父と子と聖靈の一致に基づいて一つに集められた民」として現れる。

17（宣教の使命）事実、子が父を派遣されたように、子は使徒たちを派遣して次のように言った。「あなたがたは万国に行って教え、父と子と聖靈との名によって洗礼を受け、わたしがあなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。わたしは、世の終わりまで、日々あなたがたとともにいる」。教会は使徒たちから、救いの真理を告げよとのキリストの莊厳な命令を、地の果てまで実行すべきものとして受けた。それゆえ教会は、「わたしが福音をのべないとするなら、わたしにとって災いなことだ」との使徒のことばを自分のことばとし、そのために絶えず宣教師を送り続けている。………このように教会は祈り、また働くのであって、それは全世界のすべての人々が神の民、主の体、聖靈の神殿となり、すべてのかしらであるキリストにおいて、万物の創造主である父にすべての栄誉と栄光が帰せられるためである。

教会の宣教活動に関する教令

1「救いの普遍的秘跡」となるようにと神から諸国民のもとへ派遣された教会は、教会独自の普遍性に促され、また、自分の創立者の命令に従いつつ、すべてのひと福音をのべ伝えようと心がける。

………人類の新たな状態が立ち現れようとする現時点において、地の塩であり世の光である教会は、すべての被造物を救い、かつあらたにするよう、いっそう切実に招かれている。それは、すべてのものがキリストにおいて建て直され、そして人々がキリストにおいて一つの家族、一つの神の民を構成するためである。

2 旅する教会は、その性質上、宣教者である。なぜなら教会は、父なる神の計画による子の派遣と聖靈の派遣とにその起源をもっているからである。この計画は、「愛の泉」、すなわち父なる神の慈愛から湧出する。父は、始めなき始めであり、そこから子が生まれ、聖靈が子を通して発する。父は、その無限の慈愛と、あわれみとによって、みずから望んでわれわれを造り、そのうえ、われわれを自分の生命と栄光とに参加させようとやさしく招きつつ、神の善を惜しみなく注ぎ、また今後も注ぐことをやめない。

3 神は、自分との平和すなわち交わりを打ち立て、人間の間に、しかも罪人である人間の間に

兄弟的な共同体を形作るために、わたしたちと同様のからだを取った子を派遣することにより、子にとって人々をやみと悪魔の権力から救い出し、かつ子において世を自分に和解させようと望んだのである。それゆえ、子を通して世を造った神は、子においてすべてを建て直すために、子をすべてのもの世継ぎとしたのである。キリスト・イエスは神と人との真の仲介者として世に派遣された。キリストはそのうちに神性の充満が実体的に内在しており、また、人間性においては、恩恵と真理に満ちみちた新しいアダム、更新された人間性のかしらとして立てられている。したがって、神の子は、人々を神性にあずからせるために、真の受肉の道を歩み、自分の貧しさによってわれわれを富ませるために、富んだ者でありながらわれわれのために貧しい者となったのである。人の子が来たのは、奉仕されるためではなく、奉仕するためであり、多くの人、すなわち、すべての人のあがないとして、自分の命を捨てるためである。……「父が聖化して世に派遣したキリスト」は、自分について、「主の靈はわたしのうえにある。なぜなら、貧しい人々に福音をもたらし、心碎かれた人々をいやし、とらわれびとに解放を、盲者には見えることを告げるこめに、わたしを送り、わたしに油を注いだのである」、また「人の子は見失われたものをたずねて救うために来た」と言った。……すべての人の救いのために一度行われたことが、時代の流れとともに、全世界にその成果を産み出すためである。

4 これを完成するために、キリストは、父から聖靈を送った。聖靈はその内面から働きかけ、その救いのわざを行い、教会を発展させる。確かに聖靈は、キリストが栄光を受けた以前に、すでにこの世に働きかけていた。しかし、聖靈降臨の日に、聖靈は弟子たちとともに永遠にとどまるために、弟子たちのうえに下ったのである。

5 主イエスは初めから「自分が選んだ人々を召し出し、自分の仲間とし、また宣教に派遣するため、12人を定めた」。こうして使徒たちは、新しいイスラエルの芽生えであったと同時に、聖るため、12人を定めた。次に、主は自分の死去と復活にとにより、自身においてわれわれの救いと万物刷新の秘義を成就した後、天と地における一切の権能を得て、天にあげられるに先立ち、自分の教会を救いの秘跡として建て、自分が父から派遣されたと同様に、使徒^{セイク}を全世界に派遣した。主はそのとき使徒たちに「あなたがたは……」と命じた。

この使命は、貧しい人々に福音を述べ伝えるために派遣されたキリスト自身の使命を継承し、かつ歴史の流れを通してそれを展開させているものであるから、教会も、キリストが歩んだのと同じ道、すなわち貧しさ、従順、奉仕の道、そして死に至るまでの自己奉獻の道を、キリストの靈にかられて進まなければならない。

6 教会から派遣された福音の伝達者が、全世界に行って、キリストをまだ信じていない人々や団体の中に福音を述べ伝え、教会そのものを植えつける務めをはたそうとする特殊な活動は、一般に「宣教」MISSIONESと呼ばれる。この宣教は宣教活動を通して(PER ACTIVITATEM MISSIONALEM)遂行され、普通には、使徒座が宣教地として認めた一定の地域で行われる。この宣教活動の固有の目的は、教会がまだ根を深く降ろしていない国民や社会の福音化と、教会の植えつけである。

現代世界憲章

1 (全人類と教会との深い連帯性) 現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない。それは、かれらの共同体が人間によって構成されているからである。かれらはキリストにおいて集まり、父の国への旅において聖靈に導かれ、すべての人に伝えなければならない救いのメッセージを受けている。したがって、この共同体そのものが人類とその歴史とに、実際に深く結ばれていることを自覚している。

40 (教会と世界との相互関係) 教会は同時に「見える団体と靈的共同体」であり、全人類とともに歩み、世と同じ地上的なりゆきを経験する。教会は人類社会の魂または酵母として存在し、それをキリストにおいて刷新し神の家族に変質させる使命をもっている。……このようにして教会は、個々の成員と全共同体を通して人類家族とその歴史を、いっそ人間らしいものにするために大いに寄与できると信じている。……そのうえ……教会は、福音への準備に関連して、世から、すなわち

個人からも人間社会からも、その才能と活動によって、いろいろな方法で大いに助けを受けることができると言っている。

4 2 (教会が社会に提供する援助) キリストが教会に託した固有の使命は、政治・経済・社会の分野に属するものではない。キリストが教会に指定した目的は宗教の領域に属する。ところで、実にこの宗教的使命そのものから、神定法に基づいて建設し確立すべき人間共同体のために役立つ任務、光、力がでてくる。……それうえ、教会はその使命と本質のうえから、いかなる特殊の文化形態にも、またいかなる政治・経済・社会体制にも結ばれるものではない。この普遍性そのものために、教会は種々の人間共同体の間や国家間における強い結び目となることができる。ただし、これらの共同体や国家が教会を信頼し、教会がその使命を果たすために必要な真の自由を実際に認めるかぎりにおいてである。……人間が造りだし、また絶えず造ってゆく多種多様の制度の中に見いだされる真実と、善と正義のすべてを公会議は大きな尊敬をもって注目する。なお教会にできることであって、その使命と結び付けることができるものであるかぎり、すべてこれらの制度を援助し促進することを望むものであると宣言する。教会はすべての人に奉仕するために、個人ならびに家族の基本的権利と共通善の要請を認めあらゆる政治形態のもとにおいて、自分が自由に発展できることを、何事にも増して強く望んでいる。

4 3 (教会がキリスト者を通して社会に提供する援助)

公会議は天上と地上と二つの國の市民であるキリスト者が、福音の精神に導かれて、地上の義務を忠実に果たすよう激励する。われわれがこの世に永続する國を持たず、未来の國を求めるることを知り、それゆえ地上の義務を怠ってもよいと考える者は間違っている。かれらは自分の受けた召命に応じて地上の義務を果たすべきことを、信仰そのものが強く命じていることを忘れていくからである。これと反対に、宗教生活を単なる祭典の行事と若干の道徳的義務の遂行に過ぎないと考え、地上の仕事は宗教生活と完全に無関係であるかのように、それに没頭してよいと思う者もまちがっている。多くの人に見られる信仰と生活の離反は現代の重大な誤りの一つと考えるべきである。すでに旧約において預言者は、このような醜聞を激しく糾弾し、それにも増して新約においてイエス・キリスト自身が重い罰を警告している。従って一方には、職業的・社会的活動、他方には宗教生活を不当にも互いに対立させてはならない。……職人として働いたキリストの模範に従い、人間的・家庭的・職業的・学問的・技術的努力を宗教的価値と結び付け、いきいきとした一つのものとして総合することによって、自分のあらゆる地上的活動を行えることを喜ばなければならない。すべてのものを宗教的価値によって秩序づけることによって、すべてが神の栄光に向けて調整される。

信者は自分のキリスト教的なものの考え方従って、ある状態において、しばしば、ある特定な解決策を選ぶであろう。他の信者は同じくまじめに考えた結果、同じ問題について異なった判断を下すこともあり、それもまた当然のことである。ところで、種々の解決策は、多くの人によって、それぞれの主張者の意向から離れて、福音の教えと結び付けられやすい。このような場合、自分の主張だけが教会の権威によって支持されていると考えてはならないことを記憶すべきである。常に誠実な話し合いによって相互に問題の理解を深め、相互に愛を実践し、共通善を第1の関心事としなければならない。

Pluries ipsa visio christiana rerum eos ad aliquam determinatum solutionem in quibus rerum adiunctis inclinabit. Alli tamen fideles, non minore sinceritate ducti, ut saepius et quidem illegitime accidit, aliter de eadem re iudicabunt. Quod si solutiones inde propositae, etiam praeter partium intentionem, a multis facile connectantur cum nuntio evangelico, meminerint operet nemini licere in praefatis casibus pro sua sententia auctoritatem Ecclesiae sibi exclusive vindicare.

教会の生命において行動的な役割を果たすべきである信徒は、世の中にキリスト教精神を浸透させるだけではなく、社会の真っ只中で、万事においてキリストの証人となるように呼ばれている。

神の教会を指導する任務を託された司教は、その司祭とともに、信者のあらゆる地上的活動が福音の

光に浴するものとなるよう、キリストの知らせをのべ伝えなければならない。

現代においても、教会の説く教えと福音を託された者の人間的弱さとの間に、大きな隔たりがあることを教会は知っている。このような欠陥について歴史がどのように裁くにせよ、われわれはこれらの欠陥を自覚し、福音宣布の障害とならないよう、それらに対して熱心に戦わなければならない。

74 (政治共同体の本質と目的) 公権が越権行為によって国民を圧迫する場合も、国民は共通善によって客観的に要求される事を拒否してはならない。しかし国民は公権の乱用に反対して、自然法と福音のおきてが示す限界を守りながら、自分および同国民の権利を擁護することができる。

75 (公的生活におけるすべての人の協力) 国民は個人としても団体としても、公権に過度の権限を与えないよう、また公権から過度の援助や利益を不当に要求しないように留意すべきである。……政治権力が個人および社会的団体の権利を侵害する全体主義や独裁主義の形態をとることは、非人間的なことである。……キリスト者は、権力と自由、個人の創意と社会全体の連帯性および関係、必要な統一と実り多い多様性をどのように結び合わせるかを、行為をもって示さなければならない。地上の諸現実の処理に関して互いに異なる種々の考え方を正当なものと認め、自分の考え方を正直に弁護する市民と団体を擁護すべきである。政党は共通善のために必要であると判断した事がらを促進しなければならない。

76 (政治共同体と教会) 政治共同体と教会との関係について、正しい見方をもつことは特に多元的社会において重要である。またキリスト者個人または団体が、キリスト教的良心に基づいて一市民として行うことと、牧者とともに教会を代表して行うことを明確に区別することが重要である。教会の任務と権限から考えて、教会と政治共同体とは決して混同されるべきではなく、教会はどのような政治共同体にも拘束されなければならない。同時に、人間の超越性のしるしであり、またその保護者である。政治共同体と教会はそれぞれの分野において互いに独立しており、自律性を持っている。しかし両者は、名目こそ違え、同じ人々の個人的、社会的召命に奉仕する。両者が時と所の状況を考慮して互いに健全に協力しあうならば、すべての人の益のために、この奉仕をよりよく実行できるであろう。

第2回 エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ

『福音をのべ伝える』による。

1. 第2ヴァチカン公会議にみられる社会・文化の福音化

教会憲章 31 (信徒の定義)

34 (信徒の祭司職)

36 (信徒の王職)

信徒使徒職に関する教令 5

現代世界憲章 18 (受肉の神秘)

2. 1971年シノドスの声明

3. エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ

構成

II 福音化とは何か

17 福音化の複合性

18 人類の変革

19 人類の階層

20 文化的福音化

21 生活のあかしの最重要性

22 明白な宣言の必要性

23 共同体への受け入れ

24 新しい使徒職へのかかわり

III 福音化の内容

- 29 すべての生活に関するメッセージ。
- 30 解放のメッセージ
- 31 人類の進歩との必然的な関係
- 32 修正もなくあいまいさもなく
- 33 福音的解放
- 34 神の国に根ざして
- 35 人間に対する福音的展望
- 36 必要な回心
- 37 暴力の排除
- 38 教会固有の貢献

4. 真の開発とは

1987年12月月発表、『福音宣教』1990年2月号参照。

36 (構造的罪) 普遍的な共通善の認識を妨げ、ぜひとも必要なその共通善の推進の前に立ちはだかるマイナスの要素の集積。

37 構造的罪のもととなる個人の罪

利益や恩恵をむさぼり尽くそうとする欲望。

自らの意思を他人に押しつけたいとする欲望に根ざす権力への渴望。

その結果

偶像崇拜 — 金銭崇拜、イデオロギー崇拜、階級崇拜、技術崇拜。

回心の必要

二つの罪と反対の行動をとること。

連帶 -わかちあい、ともに生きる、の精神。

第3回 救い主の使命 (その1)

序文：この回勅執筆の理由と動機、機会 [1～3]

- ① 「教会の宣教活動に関する教令」発布25周年『エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ』発布15周年。
- ② 宣教の緊急性の確信 -教皇の世界旅行により — 教会の本性そのもの
- ③ 諸国民への宣教が衰退していること。信仰の危機に直面していること。
- ④ 宣教への熱意を燃え立たせること。
- ⑤ 福音化は教会が人々と世界に提供できる本来の奉仕である。
- ⑥ 諸国民への宣教についての疑義や曖昧さに答えること。
- ⑦ 宣教の召命を育てること、神学者を激励すること、若い部分教会を励ますこと、非キリスト者の権力者に、教会の宣教の目的は人々に奉仕することであることを納得させること。
- ⑧ 教会が全勢力をあげて新しい福音化と諸国民へ宣教に献身する時が既に来ている。

第1章 イエス・キリスト、唯一の救い主

4 「キリスト教ではない人々の間で宣教に従事する働きは今でも適切なのでしょうか？諸宗教対話が、宣教活動にとって代わったのではないのでしょうか？教会の使命が目指しているのは、人間性の開発ではないのでしょうか？他の宗教には、救いに達する可能性がないのでしょうか？とすると、なぜ宣教活動があるのでしょうか？」。

5 救いはイエス・キリストからのみ来る。

パウロの主張：唯一の神と神から送られた唯一の主を信じること。

キリストは神と人との唯一の仲介者です。

6 神の計画は天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにあつめること。

7 キリストによって根源的な新しさがもたらされる。それに対してノーという自由は人間にはある。

8 人には宗教の自由の権利がある。福音を宣言することは人々に信仰を強制することではなく人々の信仰の自由を侵すことにはならない。人々はキリストの神秘の宝をしる権利を持っている。

9 「全人類がキリストにおいてほんとうに救われる可能性があることと、救いのために教会が必要であるという二つの真理は、ともに尊重されなければなりません」。

「キリストによってこの民は生命と愛と真理の交流のために設立され、すべての人のあがないの道具として採用され、世の光、地の塩として全世界へ派遣されています」 教会憲章13

10 実際キリストはすべての人のために死なれたのであり、人間の究極的召命は実際にはただ一つ、すなわち神的なものであるから、聖靈は神のみが知りたもう方法によって、すべての人に復活秘儀にあずかる可能性を提供されることをわたしたちは信じなければなりません」 -現代世界憲章22。

11 何故宣教か？キリストにおける命の新しさはすべての年代の男女にとって「良いたより」です。すべての人はこの命に呼ばれています。実際、すべての人々は、時には混乱した方法であったとしても、この命を捜しており、この贈りものの価値を知り、自由にこの命に到達する権利をもっています。

第2章 神の国

13 キリストは神の国を表す。

イエスはことばと行動だけでなくその存在そのものによって神の国を指し示す。

14 神の国の特徴と要求

イエスは社会の周辺にいる人々に特別な好意を示した。特に貧しい人々の仲間となり友人となり、彼らが特に神に愛されていることを感じさせた。

15 神の国のために働くということは、人間の歴史のなかにあってこの歴史を変える神の活動を認め促進することを意味する。神の国を建設することは、あらゆる形における悪から解放するように働くことを意味する。つまり神の国とは、神の救いの計画を示し完全に実現することである。

16 復活したキリストにおいて神の国は成就し宣言される。

17 キリストと教会に関する神の国

二つの誤り。神の国を人間的・世俗的な意味で捉える誤り。社会・経済・政治・文化的な分野・領域・段階での解放のための計画と闘争として捉え、超越的要素を見落とす。

教会論の誤り。教会を他者のための存在であり、教会は平和、正義、自由、兄弟愛などの神の国の価値を促進し他方民族間、諸文化間、諸宗教間の対話を促進する、という使命をもっている。 - キリストが沈黙している。創造論を力説するが贖罪論には口を噤む。教会の役割の余地を認めない、過小評価している。「以上の二つの考え方には、肯定的な面もありますが否定的な面もあります。まず第一にこの考え方ではキリストについては沈黙しています。彼らが語る「神中心主義」に基づいています。彼らによれば、キリスト教信仰をもたない人々はキリストを理解できませんが、他方、異なる民族や文化、宗教は、その名前はどうであれ、神という唯一の現実において、一致する（出会う、共通の地盤をみいだす）ことができるからです。同じ理由から、彼らは文化や信仰の違い野なかに反映している創造の神秘を優先的に強調しますが、あがないの神秘については黙っています」（試訳）。

18 「これはわたしたちが啓示によって知っている神の国ではありません。神の国はキリストからも教会からも分離されることはありません。既に指摘したように、キリストは神の国を宣言しただけではなく、キリストにおいて神の国は現存するようになり、実現されたのです。これはキリストのことばとわざとによるだけではありません。『すべてに先立って神の国は、神の子であり人の子であるキリスト、『仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために』（マルコ 10・45）

) 来られたキリストご自身において現れています」（教会憲章5）。神の国は、ひとつの概念や教義、自由に解釈されやすい計画ではなく、まず何よりも先に、見えない神のかたどり、ナザレのイエスという顔と名前をもったある人格です。もし神の国がイエスから分離されるならば、それはもはやイエスが啓示した神の国ではありません。（中略）同じように、神の国を教会から離すことはできません。教会が教会自身を目的にしていないことは真実です。教会は神の国に向けて秩序づけられており、神の国の種、しるし、そして道具だからです。それでも教会は、キリストや神の国とは異なったものでありながら、その両方にしっかりと結ばれているのです。キリストは教会に、豊かな恵みと救いの手段とともに、キリストの体を与えられました。聖霊は教会の中にとどまり、そのたまものとカリスマ（霊能）をもって教会を元気づけ、聖化し、導き、刷新し続けます。（中央協議会訳）／こうして、キリストと教会の間に独特の唯一の関係が生じてきます。この唯一の関係があるからといって、キリストと聖霊とは、この関係に束縛されないで、目に見える教会外にも、全く自由に働くことができます。それにしても、この独特の関係は、教会に特別な、必然的な役割を与えます。★ 教会が神とキリストとみ国と特別なつながりを得るようになります。教会は「すべての民族のうちにこのみ国をのべ伝え、これを復興させる使命をもっています」。（西田・赤沼訳）

★英訳 The result is a unique and special relationship which, not excluding the action of Christ and Spirit outside the Church's visible boundaries, confers upon her a specific and necessary role.

イタリア語訳 Ne deriva una relazione singolare e unica, che, pur non escludendo l'opera di Christo e dello Spirito fuori dei confini visibili della chiesa, conferisce a essa un ruolo specifico e necessario.

ラテン語原文 Oritur inde necessitudo singularis et unica quae, quamvis opus Christus extra visibiles... fines non excludat, munus ei singulare et necessarium confert.

「そこから独特かつ唯一の関係が生じます。この関係があるからといって聖霊が目に見える教会の外で働くことを排除するものではありませんが、この関係は教会に、特別で必然的な役割を与えます」（直訳）。

19 教会中心主義に陥ることを恐れてはならない。（西田・赤沼訳参照）。

20 神の国に奉仕する教会

教会はまた「福音的諸価値」を世に広めることをもってみ国に仕えます。……（西田・赤沼訳54-55 参照）。

第4回 救い主の使命（その2）

第3章 聖霊、宣教の主要な働き手

28 聖霊は神のみが知りたもう方法によってすべての人に復活秘儀にあずかる可能性を提供されることをわれわれは信じなければならない。

聖霊の現存と働きは単に個人に影響を与えるばかりでなく、社会と歴史、民族、文化と宗教にも影響を与えます。——また、いろいろな習慣や文化のなかに存在している「みことばの種子」をまき、キリストにおいて完全に成熟するように準備するのも聖霊です。

29 どんな祈りであれほんものの祈りであれば、それはすべての人の心の中に神秘的に現存しておられる聖霊に促されたものである。

第4章 諸国民への宣教の広大な地平

31 教会はすべての民族へ福音を伝える使命をうけている。諸国民への宣教という宣教活動には教会の本質的かつ際限のない活動である。

32 複雑で常に変化する宗教情勢。

情勢の変化。特別な宣教活動、宣教地について語ることは相応しいか？

用語の問題

MISSIO: 派遣、使命、宣教。

英語のMISSION 代表団、使節団、大使館、派遣、伝道団体、布教団、

伝道活動、伝道区、伝道本部、社会救済施設、隣保館、任務、

使命、天職、派遣、福音伝道・聖ざん式施行・聖職叙任の

使命〔権能〕。

この複雑で変動を続ける現実を、福音化という命令に結びつける難しさは「宣教に関することば」に表れています。例えば複数形のMISSIONS（諸宣教活動）とか MISSIONARIES（宣教者たち）ということばは、時代おくれで、歴史的に否定的な意味があったと考えられており、それを使うにはある種のためらいがあります。それらの代わりにすべての教会活動を言い表すのに、単数形の名詞で、MISSION（使命・宣教）と、形容詞の MISSIONARY（宣教に関する、宣教に従事する）が、よく使われています。この気遣いは、多少の建設的な面を含んでいて、現実的な変化をしめしています。諸宣教活動（MISSIONS）を教会の使命（MISSION）の中にもどすこと、あるいは「帰還」させること、教会論の中に宣教学を挿入すること、そして、教会論と宣教学の両方の分野を救いの三位一体的計画の中に融合させることが、宣教活動それ自体を新たに刺激しています。

33 諸国民への使命（宣教）はいまなお価値を持ち続いている。

3つの状態を区別する。 1) 諸国民への宣教 キリストと福音がまだ知られていない社会。

2) しっかりした教会組織が存在している社会。

3) 洗礼をうけた人々が信仰を失っている状態（新しい福音化、再福音化）。

34 固有の意味での諸国民への宣教。人々はまだキリストを感じていない、教会は人々の間にまだ根を降ろしていない、その文化がまだキリスト教の影響をうけていない社会への宣教。非キリスト者へあてた宣教という特徴。

35・36 困難に負けずすべての人々へ

あやまつた神学と宗教の相対主義 -どの宗教も同じである。神学者、ジャーナリストは、教会とともに判断する（SENTIRE CUM ECCLESIAE）という姿勢をもって使命を遂行していただきたい。しかし、教会の主要な宣教の担い手はキリストとその聖霊である、という信仰はわれわれの慰めであり希望である。

37 諸国民への宣教を実行するための枠組みの特徴

a 地理的範囲

b 新しい世界と新しい世界現象：大都市、匿名の感覚、避難民の増加。

c コミュニケーションの分野：情報伝達の分野。

39 教会の使命は自由を限定するものではなく、かえって自由を促進するものです。教会は提案します。教会は何も強要しません。

第5章 宣教の様々な道

あかし

42 福音のあかしとして世界に最も訴える力をもっているのは、人々に対する配慮であり、貧しい者、弱い者、そして苦しんでいる人々への愛です。この姿勢とその活動の基礎となっている完全な寛大さは、人間の利己主義とはっきり対立しています。それこそが人々を神と福音とに導く問い合わせを起こすのです（中央協議会訳）。平和と人権のために働くことも、それがもし、個人に対する思いやりのしるしであり、人間の充実した発展をめざしているなら、福音的なあかしになります（西田訳）。

43 政治的、経済的な権力の腐敗に正面から立ち向かう勇気と預言者としての立場をとることによって、キリストをあかしするようにと、教会は召されています。

宣言

44、45 最初の「救い主キリストの告知」

回心、洗礼

46 「こんにち、宣教者がキリスト教でない人々に向けた回心への呼びかけは、疑問視されたり、無言のうちに無視されたりしています。それは「思想的転向」（強制的回宗主義）のための活動であるかのようにみなされています。人々がより人間的になり、自分たちの宗教に忠実になる手助けが出来ればそれで十分だ、正義、自由、平和そして連帯のために働くことができる共同体をつくればそれで十分だ、と主張されています。すべての人が、キリストにおいてご自分を現し与えておられる、神の「良き知らせ」を聞く権利を持っているということが、見落とされています」。

47 以上のこと全部思いおこす理由があります。なぜなら、少なくない人が、ちょうど諸国民への宣教が行われる所に、洗礼は必要ではないものであるかのように、キリストへの改心を洗礼から切り離そうとする傾向があるからです。ある環境では、洗礼に関する社会的な面が、洗礼の信仰の純粋な意味をくらますところが見られるのは事実です。それは、ある歴史的な、文化的要素によるから、この要素がまだ存続しているところでは、再生の秘蹟がその完全な価値であらわれるよう、この考え方をとりけさなければなりません。その地方の教会共同体は悪い習慣を清めるように全力をつくさなければなりません。…………（西田訳）。

52 人々の文化の中に福音を具体化する INCARNATING THE GOSPEL IN PEOPLES CULTURE 文化内開花 (INCULTURATION)とは「いろいろな人間の文化の中にキリスト教を入れることやキリスト教の中で融合することを通して、その文化の実際の価値を親しみをもって変容させる方法」（中央協議会訳）

インカルチュレーション（土着化）とは「文化的なほんとうの諸価値をキリスト教に入れ込んで補充させ、これを内的に変化させ、キリスト教の種々の文化に根ざすこと意味します」（西田訳）。

INTIMAM SIGNIFICAT TRANSFIGURATIONEM VERORUM CULTUS HUMANI BONORUM PER IPSAM EORUM RECEPTIONEM IN REM CHRISTIANAM ITEMQUE NOMINIS CHRISTIANI INSERTIONEM IN CULTURAS.

Inculturation means the intimate transformation of authentic cultural values through their integration in Christianity and the insertion of Christianity in the various human cultures.

インカルチュレーションとは、

真に価値ある人間の文化を変容させることであり、

それはその文化をキリスト教の中で統合すること、

ならびに諸文化の中にキリスト教を根付かせること。

を通して行われる。

（私試分析訳）。

文化内開花を通して教会は、福音を種々の文化の中に受肉（具体化）させると同時に、人々をかれらの文化とともに、教会共同体の中へと導くのです。教会は教会自身の価値観を人々に伝えると同時に、人々の内に既存する良い要素を取り上げ、それを内側から新しくします。教会側としては、文化内開花を通して、教会は自分がなにものであるのかという分かりやすいしとなり、宣教のより効果的な道具となるのです。

54 基本的指針（この箇所、重要）

福音との整合性と普遍教会との交流「福音と相いれるものであり、また普遍教会と一致したものである」。「インカルチュレーションには少数の専門家だけではなく、神の民全体が関与していかなければなりません」。

55 他の諸宗教の兄弟・姉妹との対話

諸宗教間対話は教会の福音宣教の使命の一部である。

「救いの計画に照らされて、教会は、キリストを告げることと諸宗教間で対話をを行うこととの間に何も矛盾を感じてはいません」。「他の宗教を信じる人々が、キリスト教の確立した通常の手段を離れて、神の恵みを受け、キリストによって救われるという事実は、そのために、神がすべての民に望んでみられる信仰と洗礼への招きを取り消すわけではありません」。

58 良心を育成することにより開発を促進する。

教会の使命は直接、経済・技術・政治の分野に直接働きかけることではなく、福音を通して人々の良心を呼び覚ましより人間らしくなる機会を提供することにある。

59 過剰開発によってもたらされた道徳的・精神的貧困。絶対者に開かれた総合的開発。

60 至上の幸福の精神への忠実さの故に、教会は、あらゆる方法で、貧しく、抑圧された人々の味方になる指令を受けています」。

第5回 救い主の使命（その3）

第6章 宣教の使徒職におけるリーダーと働き手

61 最初の証人 12使徒

62 普遍教会と個別教会との間の絆

63 宣教に関する最高責任はペトロの後継者を中心とする司教団にある。

64 個別教会は普遍教会に対して責任をもつ。

65 宣教者と修道会

66 宣教会

67-68 普遍的使命のための教区司祭

69-70 奉獻された生活がもたらす宣教の実り（読む必要）

71 洗礼によってすべての信徒は宣教者である。

72 信徒の活動分野 地域、全国、国際レベルの政治、社会、経済の分野。

73-74 伝道士の仕事と多様な奉仕職

75 福音宣教省と宣教活動のための他の組織

第7章 宣教における協力

77

78 宣教者のための祈りと犠牲、そしてキリスト教的生活のあかしによる靈的な協力。

79 宣教者の召命の促進。

80 家庭・両親の召命への責任

81 宣教における物質的財政的援助

82

83 神の民の間における宣教活動の促進と養成

あたかも宣教活動が、主として貧しい人を助け、抑圧された人々を解放し、発展を促し、また人権を守ることであるという印象を与えるのは正しくありません。……貧しい人々は単にパンと自由に（飢えている）だけではなく、神に飢えています。宣教活動はまずキリストにおける救いをあかしし、告げることであるべきです」。

86 「実際にキリスト教ではない世界と伝統的なキリスト教世界との両方において、人々は福音的理想と価値、教会が促進しようとしている発展に次第に近づいています。事実、今日これらの諸価値について、人々の間には新しい共通の意見があります。それは、暴力と戦争の拒絶、人格と人権の尊重、自由と正義、および兄弟愛への望み、異なるかたちの人種主義や国家主義の克服、女性の尊厳と役割の肯定などです」。

第8章 宣教の靈性（宣教に従事する靈性）

87 靈に導かれて

88 キリストの神秘を生きる「遣わされた者」

89 「宣教者は愛の人です。 …… 宣教者は隣人のために命を捧げてすべての人を愛さなければなりません。宣教者は、自分の中に教会の精神、万民や個人、特に自分の（かれの）最も小さく貧しい兄弟に対する心の広さと関心をもっている「普遍的兄弟」です。このような者として宣教者は、人種、階級または主義主張の障壁や分裂を克服します。かれは世の中で神の愛、排他的ではなく、かたよらない愛のしるしなのです」。

90 真の宣教者は聖人です。

むすび

訳語の問題

LOCAL CHURCH 地方教会

PARTICULAR CHURCH 部分教会（中央出版、宣教教令、司教の任務）★

INDIVIDUAL CHURCH 地域的教会（富沢訳） 個別教会（宣教研究所訳）

★教会における司教の司牧任務に関する教令 11

教区とは、司祭団の協力のもとに牧するよう司教に委託された神の民の一部である。こうして自分の牧者に結ばれ、その牧者によって福音と聖体を通して聖靈において集められた教区は、部分教会を構成する (Ecclesiam particularem constitutat)。この中に、一、聖、公、使徒継承のキリスト教会が真に現存する。

教会法368 条

单一かつ唯一のカトリック教会は、部分教会において存在し、部分教会から成り立っている。部分教会はまず教区であり、別段の定めがないかぎり、高位区、大修道院区、使徒座代理区、使徒座知牧区および恒久的に設立された使徒座管理区がこれに準じる。

現代日本教会の論議についておわりに

—— 「刈り取り宣教論」 ——

参考文献 本田哲郎 福音宣教は《種まき》？それとも《刈り入れ》？ 『福音宣教』1991年
2月号。

エドワード・ブジョストフスキー「福音宣教と神の国建設」『福音宣教』1990年
7月号。

本田師の提起した問題

1) 福音宣教とはまだキリストを知らない人々の中に「みことばの種子」を蒔くことなのか。

2) 「みことばの種子」とは実は「キリスト」を指す。それはすでに教会や宣教者の手を経ずにすべての人の中に蒔かれている (マルコ 4/3-8, ヨハネ 1/1-18)。

3) 持っている者が持っていない者に 与える、教える という従来の宣教の姿勢は根本的に改めなければならない。実際、聖書で使われている動詞 カタングレイン 告げ知らせる、ケリュセイン 宣言する は、既に到来し、人々の間で進行している神の国の働きを、人々に気づかせるような役割を果たすものである。宣教論の見直しが必要である。

4) イエスが弟子たちを派遣したのは「種蒔き」のためではなく「刈り入れ」のためである (ヨハネ 3/35-38, マタイ 9/38, 10/1, 5, 6)。

5) イエスが12人を派遣したとき、弟子たちに与えられた「汚れた靈に対する権能」 (マタイ 10/1) は、蒔くための「種」のようなものではなく、むしろ実りを妨げている様々な抑圧とか、正義

に於する規定の枠を取り除いてすでに与えられているはずの神の命の働き、立ち上がる力、実を結ぶ力を解放する権能であった（ヨハ10/1-4）。

6) エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ は福音宣教の一番大切な要素として次の4つを上げている。相手を「理解し」、あるがまま「受け入れ」、痛みと喜びを「わかつあい」、協力していくこと。

7) 福音宣教は教会のメンバーを増やすことを目的とする「勢力拡張」の運動ではない。福音宣教は「弱さ、窮屈、行き詰まり」など、小さくされていく中でこそなされるものであり（ヨハ12/9-10）、勢力拡張は、数の力と既存社会への貢献度によって推進されるものであり、福音の価値観は反対の原理に基づいている。

8) メタノイアこそ自分の中に蒔かれているみことばの種子を実りに至らせるための唯一の条件である。

結論 こうして、一人でも多くの人が、たとえ、今、どのような身分、職責であったとしても、社会の中で小さくされている人々の痛みをいつも共感し、常に彼らの側からものごと見つめ、判断する習慣を身につけた、自分にできる範囲いっぱいまで実行に移していくこと、それがその人自身の内に蒔かれた「みことばの種」を成長させると同時に、社会全体に神の国のネットワークの結び目を準備することになるのです。社会構造の谷間にある「良い土地」から「実り」につながっていく「刈り入れ」への参加が、結局、自分自身の実りをも促すことになるような気がします。これは、わたしたちの間で、後回しにさかれている人々から学ぶ姿勢で生きるということであり、それは、とりもなおさず、イエスの「弟子」（マセテース—学ぶ者）としての生き方を選び取るということなのではないでしょうか。

エドワード師の批判

1) 社会をよくする運動、例えば、指紋押捺制度廃止運動、核実験反対運動、大気汚染反対運動等の人間の命、健康、人間の尊厳を大切にする運動は福音的なあかしであり、神の望みにかなうことであり、神の国建設に協力することであるが、福音宣教そのものとはいえない。

2) キリスト教とは無関係であっても、草の根の運動をしている市民運動グループは、神の期待する確かな実り、福音の香りを放つ実を豊かに実らせることができる。それは愛の力によるのである。しかしその力がどこからくるのかを知らなければ、それは自分の努力や業績の結果であると自惚れるようになる。

3) 貧しい人々から学ぶ、ということは分かるが、だからといって教会が福音を述べ伝え、神のことばを説く使命をもっていることが免除されるわけではないし否定されるわけでもない。

4) 1971年のシノドスでいっているように、正義のための闘いと世界の変革への参加は福音宣教の本質的~~部分~~であるが、その一つであるに過ぎず、その全てではない。

5) 後回しにされている人々を理解し受け入れ分かち合い協力することだけでは彼らにイエスの生涯、その死と復活を知らせることはできない。

その他

「新世紀に向かってともに旅をする」（第5回アジア司教協議会連盟最終報告）



1992 GENERAL MEETING

From March 24 to March 26, the Oblates came from all over Japan and Korea for their annual General Meeting. This year the input person was Bishop Takeo OKADA from the Urawa diocese. The topic was Evangelization/Mission.

The Bishop first gave us an overview of his approach, then a more detailed vision of the problems involved and finally left us with many problems to discuss, now and in the future.

He showed us where the Vatican II document on the Liturgy (SC) was like the FOUNDATIONS/ROOTS of everything that followed. After which the one on the Church (LG) was like the TRUNK, the various other documents were the BRANCHES, and finally the documents on Missions (AG) and on the Church in the Modern World (GS) were the FLOWERING/FRUIT.

The above were produced in the 1963-1965 years. The document on Evangelization (EN) was on the 10th anniversary of the last two documents and the one on Mission (RM) was on the 25th and these would be the basis for his on-going talks.

From the very beginning the GS document includes a tension between Mission and Evangelization. Paul VI chose to emphasize the theme of evangelization in EN in the line of the great Social Encyclicals starting with RERUM NOVARUM. John Paul II has chosen to stress the aspect of Mission in REDEMPTORIS MISSIO. This shows us that the Popes themselves are struggling with the tension and interplay that exist between the two concepts, emphasizing one without denying the other, always showing them not as an "either/or" but as a "but also" vision.

We can see that when the pendulum seems to go in the direction of one, the documents emphasize the other and vice-versa.

The Church is constantly struggling with the problem also of the relationship of the Church with the World, in the concrete, between Religion and Politics/Economics. Some documents and statements forthrightly try to show the underlying vision that Pol/Econ should be based on the basic spirit of Religion. Others make it clear cut that Religion and Pol/Econ do not mix. Again the tension is clear.

Other problems arise because of statements that originate from the Universal Church as opposed to the Local Churches; from those emanating from the Curial decisions as opposed to Local decisions. These local decisions can emanate from a local diocese, from the

Hierarchy of a whole country, or of a region as the Federation of Asian Bishops (FABC).

To further complicate things, we may have decisions coming from a bishop, as opposed to decisions of priests or even laity on the local level. The fact that each one comes to different conclusions about Mission/Evangelization is quite normal since from the beginning in GS you already have that tension.

The above tension of Mission/Evangelization is clear in NICE I, where this body, when considering the foundational orientation of the Japanese Church, decided to emphasize Evangelization. NICE I looked upon the gap that exists between our life within the Church and its application to the Modern World, in order to bring into focus and unify our call to evangelize the structures of Society. At the present time, there is a movement within the Japanese Church to follow the swing of the pendulum toward stress on Mission.

While re-introducing us to the central message of EN, the Bishop began with the VAT II definition of Laity, but then followed this up with the newer approach of the Synod on the Laity held in the '80's. This latter stressed that rather than say the Laity work in the World whereas the Priests in the Church, the whole Church itself works in the World with Laity and Priest having different roles, different ministries. This is based on incarnational theology.

Again the tension between Mission (the proclamation of the Gospel) and Evangelization (the renewal of the Earth), and also between the Spiritual Order and the Temporal Order, came to the fore.

EN was produced after the '71 Synod on JUSTICE AND PEACE with its emphasis that these were integral to the Gospel Message (incl. Human Rights, Dignity of People, Respect for Life) with its message of Transformation of the World and the '74 Synod on Evangelization in Today's World, continuing in the direction of the previous Synod, with the added element of Liberation of Peoples.

It is at this point that EN was produced. It emphasized again that Evangelization is a PROCESS with the interplay of very many elements and aspects neither one of which contains the WHOLE truth, ALL being necessary including both direct proclamation and witness as well as working toward the transformation of VALUES in Cultures, keeping the positive ones, renewing the negative ones and giving direction to the neutral ones. All these elements are mutually influencing each other at all times.

The necessity of the Church to involve itself in Social

and Liberational Issues (Illiteracy, Human Rights, Right to Life etc etc) i.e. the temporal order, certainly exists, but by the same token we cannot forget the spiritual order. And vice versa, the spiritual order must exist, or religion disappears, but it must also have its role in the temporal order. As mentioned before, herein lies the tension, the never-ending struggle to find the balance between the two.

Looking at the roots of the evils of illiteracy, the gap between rich/poor etc etc as coming from the piling up of individual sins into a structural sin in society. Though the word SIN is never used, the Popes have outlined the concept in there recent encyclicals. This SIN comes from three major passions, that toward materialism/consumerism, that of power/domination and that of idolatry/letting ourselves be governed by self-made gods.

We can fight these only by identifying ourselves with the poor, keeping a right vision of personhood with its values of dignity of the person, respect for life. That is where the Socialist/Communist/Capitalist Systems have failed.

After VAT II and EN, there has been the danger of identifying this emphasis on Evangelization with Social Action and that this last would be sufficient. So the present Pope decided to bring us back to a traditional view of Christian teaching by re-emphasizing Mission without denying the necessity of Evangelization. The struggle goes on.

Our Mission is based on the original mission from the Father to the Son, from whence comes the mission of the Spirit. And all 3 in different ways mission us the People of God: the Father being the Prime Missioner, the Son being the Direct Missioner, and the Spirit being the Actual/Everyday Missioner.

With this RM restates that it is not sufficient to fight evil, but we must also stress conversion and hope; it is not sufficient to be a social worker, but the proclamation of Jesus Christ as the unique Saviour is important; that it is not sufficient to have Action, but that we also need Prayer; that it is not sufficient to find the Values in Society and to develop them, but also to witness Jesus Christ.

NICE I had taken these two elements as the basic outlook of the Japanese Church, but had chosen to stress the former as had most documents since Vatican II had also done.

The Pope reminds us that we must avoid the two extremes of an "anthropo-centered" and "theo-centered" notion of

God's Kingdom, to one centered in the Redeeming Christ and his Church.

After reminding us that the Spirit acts in and through other Religions and Cultures, the Bishop discussed the meaning of Mission which needs 3 different Japanese expressions to explain it: HAKEN/SHIMEI/SENKYO. This mission is to the areas that ignore Christ; that haven't sufficiently received his message; and that have been dechristianized. It also encompasses not only new lands, but new situations (cities, immigrants etc etc) and the whole field of communication.

In treating the Paths of Mission, after re-proclaiming the usual paths of witness, direct proclamation, conversion and baptism, the bishop spent much time on the last two items of John Paul's suggestions of Inculturation (incarnation in and transformation of cultures) and Dialogue with other religions, always keeping in mind the need for evangelization in this process. Here the Pope seems to be tying together the Mission/Evangelization axis.

Bishop Okada finished by introducing us to the most recent FABC report which stresses the need in the Asian area for acting as Christ did which is a proclamation; dialogue with other religions and cultures to find points of unity; and direct proclamation. It also stresses the need to think of not only what the Church of Asia must DO but also what it must BE in this vast area. The suggestion is that we put on the face of the COMPASSIONATE Christ, in order to be and feel WITH the Asian people: poor, women etc etc

RM as EN, though stressing one or the other of the Evangelization/Mission axis does give some time to the other stress. RM toward the end, in describing the role of Active Congregations as well as that of Women's Congregations and of the Laity in general, reminds us of the necessity of involving ourselves in the various social works and pressing problems of the times, which we have pointed out so far.

The bishop also introduced us to the FABC report of 1990 which re-emphasizes most of the points which were brought out so far, especially as it applies to the Asian scene.

He finished by giving us an evaluation of the Honda/Brzostowski debate about "Reaping Mission" as opposed to "Implantation Mission". Conceding that the vision of Fr Honda is a very important contribution to our outlook, he also emphasized that the traditional teaching of implantation must go hand in hand with that view. We see another tension between two opposites which we can only reconcile not by eliminating the other but by cooperating with it.

For me personally, this meeting helped me to put both sides of issues in perspective, from VAT II, thru EN and RM, as well as the above mentioned debate. I could not help but recall Ron's thesis in its latest version where a number of these problems were well analyzed.